

2. 永楽の聖旨

『立齋閑録』は、四庫子部存目の記すところによると全四巻、明の宋端儀の著である。わたしが見たのは明抄『国朝典故』の残本で、上二巻しかなかった。第二巻は“靖難”の時の事を記したもので、黄子澄ら四十八人の“奸臣”の事跡があり、そのなかに何節かの白話の論旨がありすこぶる面白い。いま次に抄録する。（原本の脱誤難解のところは皆そのままとする。）

永楽十一年正月十一日教坊司等の官が右順門口で奏上した。“奸悪齊泰の姉並びに二人の外甥の妻がおり、又黄子澄の妹がおります、四人の婦人は、毎日昼夜、二十人の男に看守させ、若いものは皆妊娠しました、男を生めば小亀子にさせたほかに、また三歳の娘がいます。”“そうしろ。大きくなったら売女の代物だ。”奉じて飲んでそうした。又“当初黄子澄の妻はガキを生み、今では十歳になりました。又観察使の家には鉄信の家のあまっちょがおります”と奏上した。“どちらもうしろ。此れを飲め。”奉じて飲んでそうした。

正月二十四日校尉の劉通らが帖を賜り、犯人張鳥子等の男と女六名を連座させた。奸悪の事のためである。又犯人楊大寿等の男と女五百五十一名を連座させた。奸悪の事のためである。“よし。ここ何日かしょつ引いた者はすべて練家の親類だ、先日のあの時にはまだ気力のある奴は城外にいて入ってこようとしなかったが、咎めてやっつけよ、又長く錦衣衛に護送された中から皆引っ張り出して、刑科と共に直に取り調べよ。親近の者を選び出して凌遲の刑にせよ。遠い親類は四方に放逐して兵隊にせよ。もし遠い親類で近親の者を吐かない場合も、凌遲にしろ。”飲んでそうした。

謝昇の妻韓氏は年三十九、本年九月二十日淇国公丘福のところへ送り女郎屋に転じさせた。

教坊司右韶舞安政等の官が奉天門で上奏した、“毛大芳の妻張氏は年五十六で、病死しました。”聖旨を奉じて、“錦衣營に上元県に命じて門から担ぎ出して犬に喰わせろ。此れを飲め。”

永楽某年某月二十三日礼科は犯人程亨等の男と女五名を連座させ、奸悪の事のために、合わせて当該の役所に送る。“よし。この張昇の親類は鉄だ、錦衣營に捉えさせて焼き殺せ。此れを飲め。”

以上五節は、史実として見れば、15世紀の初めに起こり、ヨーロッパもちょうど宗教裁判が行われ、奇とするに足りないようである。五百年來、世界はつまるところ相当良くなったのだ。しかし中国では、夏徳卿先生が言うように、“唐以降、男子は奴隸、女子は動物になって”、この現象は今でもあまり変わってない。われわれはつまり自分たちの住んでいるのが文明の世界なのかそれとも野蛮の世界なのか知らないのである。わたしは上に記録されたような聖旨が以後またあったらろうとは信じないが、又朱棣の死霊がまだ人間世界に生きているように思う。だからとても恐ろしい。礼教風化をいう大人先生たちがそうであるばかりか、“車を引いて飲み物を売る”にしたところでみな同じで、彼らがふだん罵り合っている言葉を聞くだけで彼らの心がまだ邪鬼に占領されていることが証明される。——そうした邪鬼を追っ払うのが知識階級の職務であり、わたしは彼らがせいぜいこの仕事をするよう希望する。これは実際他の事柄に比べてより根本的なものだろう。

※初出：1925年1月26日『語絲』第11期